

カスピ海油田の共同探査・開発に係るトルクメニスタンとの合意

今般、領有権を巡りアゼルバイジャンとトルクメニスタンとの間で長年対立が続いてきた、カスピ海沖油田の共同開発に関する政府間合意が結ばれました。

1. 1月21日にアリエフ大統領とベルディムハメドフ・トルクメニスタン大統領とのビデオ会議が行われ、その席で「カスピ海・Dostluk(友好)鉱区における炭化水素資源の共同探査及び開発に関する両国政府の了解覚書(MOU)」が締結されました。
2. ソ連末期にアゼルバイジャン技師が同鉱区を発見し「Kapaz」油田と命名、その後ソ連崩壊後に自国領海内に属すると主張するトルクメニスタンは「Sardar」油田と独自の名称をつけました。同鉱区はアゼルバイジャンとトルクメニスタンが主張する境界線の間位置することから、領有権を巡り両国間で長年対立が続いてきました。
3. 2018年8月にカスピ海の法的地位に関する条約が両国を含む沿岸5か国によって署名されたことを契機として、両国は同油田の開発に関する本格的な交渉を開始しました。両国大統領は本件を歴史的合意と位置づけ、同鉱区は新たに「Dostluk」(友好)と名付けられました。
4. 同油田はアゼルバイジャン領にあるACG油田から東に僅か数十キロメートルに位置することから、BTC(バクー・トビリシ・ジェイハン)パイプラインを利用することができれば、トルコや欧州市場への出荷が可能となります。また、今回の合意はトルクメニスタン産ガスを「南ガス回廊」を通じ西側に供給するための、カスピ海横断天然ガスパイプライン構想の実現に向けた足掛かりになるとの見方もあります。

(以上)